

花の季節に、同志社大学国文学研究室の創設以来の頭であり礎でもあった南波浩教授の御退職の日を迎えざるをえない。

一九五五年四月、南波先生をはじめとする五人の教授がたが、われわれ一期生五十数名を歓迎してくださった。明徳館五階の何の飾りもない会議室であった。地下食堂のコーヒールームとキーキが響かれた。研究室を代表して歓迎の辞を述べられたのは南波教授であった。学を拓かれようとする気魄と、その講筵に初めて列することを許された若者に対する慈愛とに満ちあふれていた。

戦後の日本文学研究の記念碑たる「物語文学概説」から、不滅の御力作である「紫式部集」に至る一連の御研究に随伴することのできたわれわれは幸福であった。それにしても、鋭利な史観と緻密な実証精神を学びとるにはわれわれはあまりにも非才でありすぎた。このささやかな記念号を呈することが、かえって、先生の名を汚すことにならぬかを恐れる。しかしこれが現実である。われわれはここから再出發せざるをえない。幸い御健勝であられる先生がさらに厳しく御叱責下さることを求めるに切である。陳べるべき私の感慨を省きつつここに感謝の念の一端を記す。

(廣川勝美)

同志社国文学 第十八号

昭和五十六年三月二十日 印刷

昭和五十六年三月二十日 発行

編集 廣川勝美

発行 同志社大学国文学会

(代表) 南波浩

京都市上京区今出川通烏丸東入

振替 京都二七三七

印刷所

共同印刷工業株式会社
京都市右京区西院久田町